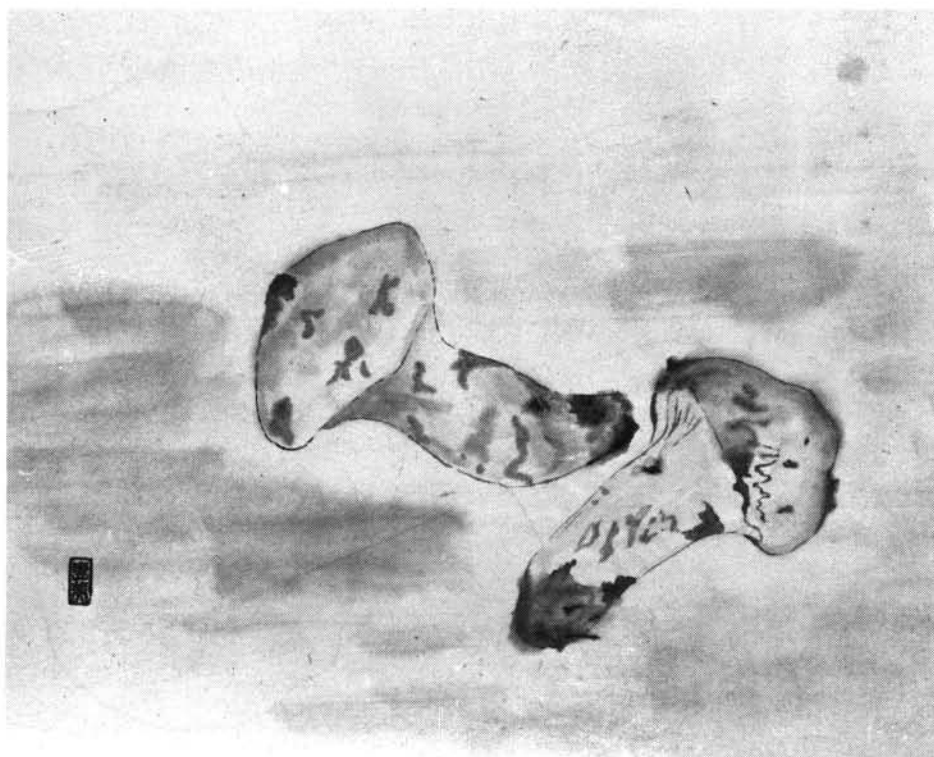


あしふ

131号

1974・10



もくじ

【社会の窓】

学童集団疎開の記録	矢内 花竜	2
騒音公害、そして……	小川 倍恵	7
36才のゆううつ	十日市睦子	8
ほのぼのした話	日比野 都	11
墓参り	吉田てる子	11

【リレー随筆】

小さな窓口で	田和 明子	10
--------	-------	----

【随筆】

秋のおとづれ	重川 雄	14
--------	------	----

【文芸】

ある青春(33)	津堂 健治	13
----------	-------	----

【お便り】

土井邦子	大庭陽子	9
永堀のり子	川中重雄	12
小川倍恵		14

【表紙絵の言葉】

平田恵美子

9

◎記念集会和バザーのお知らせ

16

学童集団疎開の記録

東京都

矢内花 箋



以前「わいふ」で「私の受けた教育」の特集をしたとき私も学童疎開当時のことを少し書きました。その後いくらもたたないのに教育界に対する政府のしめ付けは異常なまでにエスカレートしてしまいました。このスト問題への警察介入で新聞にもいろいろな記事が載せられ、その中にこんな記事がありました。東京の下町で配られた文部省賛成派のピラに「文部省のいうことをきかないわい先生を……云々」という文があつてまさに政府側の語るに落ちたものというのです。私はこの記事でまた昔を思い出しました。それでは政府の、文部省のいう事をきいていたい先生達がどんなことを私達にしてくれたのでしょうか。またどんなことしかできなかったのでしょうか。

今私のところに小冊子があります。四十三年頃私達疎開の仲間が私の記録を中心に各自思い出や意見を出し合つてまとめたのです。以前の拙文もこれを整理したのですが、今度はこれ自体皆さんに読んでいただきたくりました。

ここまで書きましたら八月十五日のテレビ「奥さんごいっしょに」で、「疎開のころ」という番組がありました。戦後先生の立場から一番先に疎開の記録「浮雲教室」を書かれた代沢小の浜館菊雄先生が出席されていましたし、どんな取り上げ方になるか楽しみに見ていました。ところが題名が曖昧なとおり、ただ思い出をなぞつただけの中心のはやけた番組になりがっかりしました。番組の終りに意見を求められた浜館先生も「どうもなつかしい思い出というような話ばかりで」と不満を表明しておられました。それがそのとおりだと思います。この学童集団疎開は教育の恥部なので教育界では避けて通つたがるのだと浜館先生のお話でしたがそのとおりでしょう。そしてこの番組の取り上げ方を見てもマスコミの世界も当らずさらずで、文部省の顔色をうかがっているのではないかと思いました。

特異な状況下での生活でしたがそれだけに教育の本質的な問題が豊富に浮び上つて来た大切な経験（教育界全体の）だと思つたのです。自分で体験した人は黙っているべきではないと考えています。「また同じこと……」と思われるかもしれませんがどうぞ読んでください。



はじめに

小金井第一小学校二年の学年通信「ちびっこ」No.20にイスラエル動乱を報じて「一小的校歌に、平和の小ばと空たかく……」というこぼれがあります。今こそ校歌の精神とJ.R.C.の精神で教育を進めるわたしたちは、TVや新聞のニュースに目をむけ耳をかしていき、教室で家庭で、平和を願う話し合いを進めていきましよう。」とあつたが、まさに子ども達の幸せを願う親として先生として平和程願わしいものはない。考えてみると、戦争を体験として知っている年代といふものは今のPTAの会員達でだいたいの終わり頃ではないだろうか。私は現在四年と三年の子の母だが終戦当時は六年生である。大体、昭和十年頃までに生まれた人達でなければあまり戦争はおぼえていないであろう。（例外はあるが）世界的にはベトナム戦争、イスラエル動乱をはじめとして、あちらこちらで不安がつづき、国内では逆行を感じさせるような教育指導要領の改訂をはじめ戦争を美化しているような映画にいたるまで、私達は何か不安を感じずにはいられない。子ども時代に戦争を体験した私達が、そのつらかった事を思い返して子ども達の平和のために努力をしなかつたら、今後、そのような活動を期待することはだんだんに困難になるであろう。辛かつた思い出はいろいろあろうが、「けやき」の性格上、学童受難史ともいえる「学童集団疎開」をとりあげて先生、子ども共々に受けた傷痕をふりかえり、子ども達を二度と再びこのような目に合わせないため

に反省のよすがともしたいのである。

(一)

昭和十九年八月二十四日の夜、杉並区立西田国民学校生徒三年以上百二十七名、先生四名、寮母さん（三人位）は、桃井第一、若杉、立教などとともに長野県小県郡別所村をめざして出発した。前途のつらさをしらぬ子ども達は遠足にでも行くような顔をしていたが、皆何となく不安であつたには違いない。私は水盂の真似事をして親に妙な顔をされた覚えがある。

翌朝目的地について各校はそれぞれ定められた学寮へ入った。温泉町だから寮はみな旅館であり、浴室も広かつたから、お寺等に入った学校に比べて幸せであつた。各室のひろさに合わせて四人位から七、八人まで、六年生を室長として男女別に部屋割がきめられた。授業は学年別に三部屋位をつなげて、五年が三階、四年と三年が二階の東と西、六年が別館の二階というふうになつた。村で支度をしてくれた白木の長机に四人ずつ正座した。食事はこの体制であつた。これは賢明なやり方であつた。室毎に食事をした学校で上級生が下級生の食事のピンハネをするなどがあつたからである。食器はお椀に井、箸、皿、湯呑が各一個ずつで用が足りた。（たいしたおかずなどなかつたのだから）

食事はこび、机を並べるのは男子の役、配膳と食器洗いは女子の役で、中でも御飯の配膳はちよつとの事ですぐ恨まれるので大変な役であつた。一つの決つた井によつて各器に入れてゆくのだが

御飯のたき加減によつて多少量が違ふ。五年生は三十八人の中であつたと増配と減配の順序がきまつていて、今朝は御飯が足りないとなると、今度は○○さんかというつてその子から大さじ一杯位のごはんがけずられる。多ければ今日は××さんからその子からそれ位の量のごはんがつけ加えられた。食器洗ひは女子の役であつたが、五年生は男女各十九名ずつの同数であつたため、まもなく「相棒」と呼ばれる相互扶助制度が生まれ、しもやけの痛い女の子が相棒の男の子に食器を洗つてもらふという風景がみられた。相棒は男女それぞれ背の順に並んだ教室の席順のとおり端から組み合わせたもので、相手の困つているときにたすけ合ひ少し余分にたべ物を持つているとそつと相手にわけてやつたり、何ともほほえましい制度であつた。

部屋割がきまり、教室がきまり、生活が始まつた途端、子ども達が襲われたのは、ひどいホームシックであつた。別所について二、三日あたりから夜になると頭が痛いとか気持ちが悪いくつてメソメソ出す子がふえ、一週間もたつ頃には殆んど全員が夜になるとふとんをかぶつて泣いた。一人が泣き出すと途端にあちらこちらで我慢しきれずに泣き出すのだから、一時はまるで手がつけられない有様であつた。私は三階にいたが、そんなひどい或晩、いきなり柴田先生があがつて来た。「誰か泣いているのは。」一喝されてみんなふとんをかぶつて息をこらした。きびしい事で父兄にも知られた女の先生である。一人一人顔をのぞか

れて泣いていた子はみな下に連れて行かれた。さぞや叱られるだろうと思つていた私達に先生はビスケットを一枚ずつくれた。「これを食べてだまつてねさい。」とそういわれただけだつた。

この頃、女の子の間によくうたわれた歌がある。東京にいたときは誰もうたわなかつたのになつたという間にひろまつていた。

一、笛やたいこにさそわれて

山のまつりに来てみたが日暮れはいやいや里恋し風吹きや木の葉の音ばかり

二、かあ様こいしとないたれど

どうでもねえねえよお泊りよししくしくお背戸に出てみれば空にはさむいあかね雲

三、雁かりさをになれ先になれ

おむかえたのむというておくれ三週間もたつ頃には夜のさわざは一応納まつた。だが子どもたちは各人その性格に応じていろいろに変わったようだつた。そしてショックな事件が起つた。

信州の秋は早く夜はすぐ冷え、九月の初めには皆夏ふとんを送り返し家から冬ふとんが送られて来た。旅館のこととして三階専用のふとん部屋があり、毎朝をこまでふとんをかついでしまひに行つていたのだが、或朝私が一番先にふとん部屋をあけた途端「ワアツ」と声をあげてしまった。壁、ふすま棚、一枚だけ残つていた私の夏掛、みんな真黒に焼けこげていたのである。「うちへ帰りたい火をつけたんだつて」という噂はすぐ流れ、

事実、間もなく六年男子が一人だまつて連れ帰られた。焼けた私のふとんは学校で新調してくれて五年担任の山岸先生がいろいろ慰さめてくれたが、使わなくなつていたふとんでもあるし、子どもは案外平気なもので、何んてそんなに先生が深刻な顔をしていろいろ言つてくれるのかなとかえつて先生にわるいような気がした。

おねしょぐせのついた子も何人かあつた。恥かしい事でもあるし三年の子のおねしょしたふとんを六年の姉さんが干しているのなどお姉さんの方が気の毒な気がした。

寝言のひどくなつた子があつた。暑い間、午後ひるねの時間があつたが、そのときにいろいろおしゃべりをしはじめ返事をするときまた受け答えをする。部屋中ゴロゴロところがつてそれだから皆がキヤキヤアサわぐ。とうとう二、四日目に先生に知れ、「寝言に返事をしたりさわいではいけない」と叱られた。その子は間もなく全然声が出なくなり、しばらく病室にいて東京へ帰つた。

笑い顔をしなくなつたのはどの子にも共通であつたが、おもしろい話などきけば笑う子と、それでも笑顔をみせず、数ヶ月もたつてからやつとなおつたような子もあつた。こういう場合、割合早く環境に順応出来るのはやはりほかからで積極的に行動的な子どもだつたように思う。二十年以上も前のことではつきりとはいえないが、そういう子は自分の落ち着き場をとらえるのがわりと早いようだった。積極的な子はまたとかく斗争的にな

りやすかつた。気持ちも胃袋も満たされないのでから無理もないと思うが、それは先生対生徒、上級生対下級生、級友同士といろいろな形をとつてあらわれた。

面白いと思うのは、上が女の子で下に弟妹のある場合、姉の方が何かにつけて口喧しく弟妹を監督した事であつた。整理整頓が悪いとか着物のこととかで小言をいうのだが、はたでみてみるとまていじめているとしか思われぬ。責任感からそうなつたのだらうと後になって気付いたが、当時はみんなて妹達の方へ味方してしまつて姉の方を白眼視した。特にひどかつた日さん姉妹の場合は、そればかりではないだらうが冬になつて姉の方が病室になり、二ヶ月以上も病室ですごした。

(二)

さて、一ヶ月もたつてだんだん馴れて来ると、私達の目に先生達の姿がだんだんはつきりみえて来るようになった。一日に数時間、教室で接触するだけと、四六時中一緒にいるのとは訳が違ふ。他の学年ではどうであつたか、極端に担任と対立したはなしはきかないが、五年生では一ヶ月もするとそのような雰囲気が生まれ、特に女子にその傾向があつた。子ども達が「山岸先生は嫌い」という理由にはいろいろある。話す態度とか授業の仕方とか、また五年ともなれば異性に対して潔癖になつて来るための感情……例えば身の廻りの用を言いつけるのや何人かの女の子を先生の部屋に泊らせるのが何んとかいやらしいとか細かな事が一つ一つ嫌いの対象になつているのであ

る。また今考えれば多分に先生同士の感情も反映していたと思う。前述の柴田先生は本校の頃五年女組の担任で男組の山岸先生とはあまりしつくりいつていなかった。一緒に暮すようになればそれが生徒の目にみえて来るし柴田先生もた一人女の先生なのでもと受持った五年女子の何人かをよく話相手としたのだが、その折々に感情が生徒に伝わってしまう。反山岸組をリードした何人かのうち、私外二、三人が柴田先生に特に可愛がられていた事がそれを裏付けていると思う。

九月の末頃だったか、授業中に私だけが柴田先生に呼ばれた。職員室へ行くところから手紙が来ているからといって先生が読んでくれた。いつもなら皆一緒に渡されるのにどうして特別にされるのかな、と思ひ乍ら聞いていたら涙が止まらなくなった。それからキヤラメルを二粒もらって休養室で休んでゆくようにいわれた。もらったキヤラメルをしゃぶりながらそのときねていた誰かのふとんに一緒に横になって本を読んだりして一時間位遊んだが、何で柴田先生が私だけこのようにしたか一向にわからなかった。恐らく私が妙に尖った顔でもしていたのだろう。

女の子達の気持が反抗的になっている事に山岸先生は勿論気付いていろいろ努力はされたと思うが、私達はそれらのすべてを逆に先生の小細工として受取った。例えば授業時間中でもよくゲームをしたり山の方に散歩に行ったりしたが、私達は「勉強が遅れる」と遊んで了ってから陰口をきいた。算数の授業でも殆んど自

習のようでも進む子はどんどん進んで進めぬ子との差が大きくなりいたが、私達はそれに文句をつけた。

はじめのうち一日おきに別所校へ通った五、六年生は十月頃からやはり一日交代に中塩田村の学校に通うようになった。別所から電車沿いに田畑の中の道を小一時間歩いたが、この往復に信州の秋の美しさを満喫する事が出来た。抜ける程青い秋空に長く裾をひく浅間山、噴煙の多い日には巨大な煙の柱がニョッキリとそびえ立ち上の方から少しずつくずれてゆく。黄金色にはるかかなたの町並まで続く田、別所のうしろにそびえる男神、女神の山かなだらかにつくまわりの山々は色とりどりに紅葉をみせ、白く光るすすきの丘につづいていた。葉を落した木に真赤な柿がいっぱい、どの家にもあった。少し大きい家は白い土塀と土蔵を構え、その白さがまぶしい程美しかった。(美しさの故ばかりでなく私達はよく浅間を眺めた。浅間のはるかむこうの東京の空へ想いを馳せるからであった)

この美しい道を歩きながら時々気になる事が起った。学寮を出るときは並んで出るのだがだんだんに列が乱れて来る。先頭と一番あととの差が三、四百米にもなると私はだんだんイライラして来る。今でもだらしなく道を歩く人を不快に感ずる私のだからこれは性分なのかもしれない。「ちゃんと歩くように注意すればいいのに」と気持ちの鋭先は大抵山岸先生に向けられた。何度かこんな事があった揚句、或日とうとう私は途中で先生と衝突した。やはりそんな風にイライラし

ていた時であった。もう五百米位で中塩田校というところで「駆足」と声がかかった。だがもう四〇分以上歩いていたのだから私にはそんな事はさらさらしたくなかった。命令を無視して私の外二、三人が普通に歩いていった。学校の少し手前で道は二股にわかれる。そこで皆は馬跳びをしていた。

「遅れて来た人はとぶんだって」と誰かがいった。皆順々に跳んでいったが私はとぶなかつた。一度先生を無視した以上今日は徹底的に反抗してやれ、私の強情の虫がムラムラと頭をもたげていた。「皆跳んだか」先生が戻って来た。「松坂さんまだです」と男の子が言った。「早くとべ」と先生は私にあごをしゃくった。返事もしない私に少し腹をたてたらしく先生は「おい」と私の肩を小突いた。「いやです！」叫ぶなりその手を振り払って私は一歩跳びのいていた。先生の手にさわられた肩の感触が身ぶるいたい程いやだった。先生はちよつと黙って立っていたがこわばった顔をして歩き出した。皆ソロゾロとその後をついて行つた。

帰りみち、ちよつと中間あたりで先生の声がかかった。

「松坂を残してあとは駆足！」それ来たと思つた。あれ程やつた以上ただですむ筈がない。皆の目の前で先生の權威にかかわる事なのだ。先生の方でも目頃から目障りな奴を一度こらしめてみたかつたであらう。授業がすむまでおあすけにしていただけだ。そこはちよつと道の下を小さな流れがぐくって橋の大きな割に背の高い欄干がついていた。その欄干に

もたれて私は皆をやりすごした。ニヤニヤ笑ってゆく男の子もいれば、「しっかり」と応援してゆく女の子もいた。

どうしてとばなかつたかという事から先生は口を切つた。私はそっぽを向いてだまつていた。目の下をきれいな流れがサラサラと音をたてていた。この水、流れてどこまで行くかなあ、頭の半分位でそんな事を考えた。「東京まで行っているかしら」そんな事を思いつくとなんだか悲しくなってきた。「君みたいに先生のいうことをきかない生徒はいないんだぞ」という声がきこえた。女の子一人に手を焼いて困っている先生がすこしおかしかつた。ざまあみやがれた。何を言つてもだまりこくついている私に先生はとうとう腹をたてたらしく、いきなり私の肩口を突きとばした。「もういい行け！」そのまま私は歩き出した。もうそろそろ夕方だった。別所の入口にかかる頃あたりはうすぐらくなりはじめ、坂の上の方の家並に灯が入っていた。まだ明るい西空を背に、男神、女神が黒くそびえ、宵の明星がその上でキラキラと輝いていた。寮に入ると、心配して来てくれたらしく鶴田さんがとんで来た「どうだった？」

(三)

「だいじょうぶよ、何でもないわよ」そう答えて私は部屋に帰つた。部屋にはおやつがとつてあつた。大さじに軽く一杯のいり豆が。

たべ物に關してはここに書いていたらいくら書いても紙数が足りなくなるだろう。当時の日記をみると朝から晩まで食物のことはかり、「食物日記ね」と後年

皆で笑った位なのだから。そのためいろいろな事件がたべ物をめぐって起きた。私は五年のおかず係だったが何のかのと男の子に文句が多い。もう一人の係と相談して先生に言いつけた。そうしたら先生は自分の部屋に私達二人と男子全部を呼び男の子の前でその子の言った事を言えという。しかたがないから男子の一人ずつを名指してあいつたこう言ったと告発して皆に各自の罪を認めさせた。このことを後々まで覚えていた男の子がいて私の結婚披露の挨拶にこの話を持ち出し、「当時の松坂さんは我々男子にとってまことに恐ろしい存在でした」と一席やって私を苦笑させた。

ごはんにもいろいろと混ぜ物が入った。当時めずらしくはなかったが、母親なら絶対に作らないようなごはんもあった。大豆入りのごはんが豆がゴリゴリと固いのだ。水につけただけでお米と一緒にたいたのだろう。当然下痢をおこす子がふえて、このごはんはまもなく出なくなった。

御飯で起った最大の事件は卯の花の中毒だろう。十月の中頃だった。午後から男神山へ薪運びに行った。太さ15cm長さ2m位の材木に縄をつけて一人一本ずつ一時間位の道のりをゴロゴロとひきすずって帰ったが、帰りついてお手洗いにいくと吐瀉物がある。洗面所もよごれている。三年生は別校で授業だったのだが、その帰りみちから何人かが吐きはじめていた。夕方までには全員が気分が悪くなり、殆んどの子が吐いていた。つきあげる吐気に間に合わない子どもたちが廊下から屋根へ吐いてしまうので、その臭いやきたなさだけでも気持ちが悪かった。吐

かずにすんだ子たちは夕食におかゆをもらったが、それをたべて吐いた子も何人か出た。夜、皆に渡された薬はエビオスを粉にしたようなのが一包で、自然に癒えるのを待つと同じだった。この共同炊事所で賄われていた立教、桃井第二も同じ状態だったから、中毒患者は四百人近いことになる。上田市から運んだおからを煮付けておひるにたべたのが原因だった。重症者こそ出なかったが、これが他の食物であつたら命にかかわったかもしれない大事件であつた。これ程の大事件も東京の親達へは極秘にされた。私が帰って話をするまで母は知らなかったのである。（手紙の検閲ははじめからきびしかった。）

二度位おらずに肉の出た事があつた。野菜と一緒に煮付けてあつたと思うが、当時は肉のきれはしだけで大ごちそうだから肉の種類などにはおかまいなしにたべてしまった。牛や豚ではないのはそのときにわかっていたが、十年後皆で別所を訪問した折に「村の野犬狩の獲物だ」とおしえられた。ウヘッと思つたがこれは完全にあとの祭り、とにかくその時はおいしかった。



理由がなければ帰れないというあきからめから、いつか子どもたちは帰りたいと

いう気持ちを奥深くしまい込んでしまつたが、食物に関する神経はいつもときたままされていた。そのため子ども同士がごはんのたべ方についてひどく口喧しくなつた。惜しんでたべているようにチビチビたべたり、またガツガツたべるのはみっともないというのだ。そのためにいつも誰かが陰口をきかれ、それがいやさに皆つとめて平静にたべるようになっていた。

ところが私たちがみなひどく早く食事をすましていう事があとになつてわかつた。三月末第二次疎開の子たちがついて食事をしたとき、その子たちが半分以上しかたべていないときに私達はもう全員が食事をすましていたのである。ぬすみぐいはたびたびあつたらしいが誰も忘れていない一幕があつた。ちょうど昼食時に急ぎの連絡で他校へ行つた五年I君の御飯を同じ五年のK君がぬすみぐいしたというのだ。こたつにもぐり込んでたべたから、こたつの中が御飯粒だらけだったという見て来たような話まで伝わつた。その次の日、午後の授業時間にK君は先生の机の前に坐らされた。

「K、先生のきく事に正直に答えろ、いいか」K君はうなづいた。「おまえはIの御飯をたべたのか」「たべません」K君はつきり答えた。「よし」先生の語気が荒くなった途端ピシッと鋭い音がしてK君は横ざまに倒れた。起上がったところをまた反対に、K君の体は左右ヘグラグラと倒れた。

「K、その根性をたたき直せ！」先生の声がとんだ。K君の顔は赤から紫色に変わり、女の子たちは皆下を向いてしまつ

て隣同士そつと顔を見合せていた。K君の鼻から血が噴き出してこのさわぎは一応おさまつた。

夕方K君は玄関わきの階段の下にたたされてた。もうすでに冬なのに一番寒い場所なのである。打たれた顔は紫色のまだらになって腫れ上がり、板敷に素足の指先まで紫色だった。私と一緒に通りかかった鶴田さんが「足がつめたいでしょ」とそつときくと、「仕方ないよ、僕が悪いんだから」と落着いて答えた。どちらともなく「ねえ、先生にあやまつてあげましようよ」と言い出して、二人で職員室へ行つた。他の先生は留守だったが私達一人の詫入れには先生も困つたらしく、「わかつた、ゆるしてやる」と言ってくれた。

その後やはり人の御飯をたべてしまつた子が出たが、このときは委託訓練に行かしてもらえなかつた。委託訓練というのは、生徒を一人一組にして村のしかるべき家庭へ一泊させるのである。訓練とは名付けてもその実村人の慰問であり、何よりもおなか一杯たべられるのがうれしかった。一ヶ月一回の何よりものたのしみなのだから、これに行かれないのも辛いことだった。

五年女子と三年男子に京橋のしにせのお菓子屋さんの子がいて、その家から全員にビスケットを送つて来た。一人七枚ずつ配られたが、あとで何かの話の折、その子がふと口をすべらせた。「あのときのビスケット、七枚はちじやないって、うちで言つてたわ……」その前から食料の隠とくがあるらしいのは皆うすう

す知っていた。三年の男の子がいり豆のぬすみぐいをしておなかパンパンに張ってしまったり、うちから送って来るお菓子の配られ方が何となく少なかったりしていた。後年きいたところでは、それをよく知っていた男の子たちは一部屋がグループで職員室へ泥棒に入っていたらしい。六年生が指図をして三年が見張り、四、五年生が盗んでいたという。

そういうわけだからおおよそ口へ入るものは何でもたべていたといつてよい。男の子たちはよく歯みがきをなめていたしお味噌汁の実に入っていたタニシをからごとバリバリたべたなどといういさましい子もいた。よくなめたのが梅肉エキスでちよつとなめただけでとびあがる程すっぱい。唾液が出るだけで何かたべたような気になっていたのだろう。

親の方も我子にたべさせたい一心でいろいろとちえをしはって送って来た。うちから送って来たお手玉の中味がいり豆だったので、その子は勿論、その部屋の子みんながおやつにありついたという話もあった。私のうちからも「お菓だから毎日一包ずつのみなさい」という手紙付きで一つずつ分包した薬のつみを送って来た。薬というのでそれは全部私に渡されたが、部屋へ帰ってなめてみたらぶどう糖だった。

(四)

美しい信州の秋はたちまちきびしい冬に早替わりした。学寮のお湯は温度が低く、少し湧かさなければ適温にならない。秋のうちに一生懸命運んだ薪は冬半ばでつきて、私達はぬるいお湯につかった。

ちようど入浴していたとき上田市が爆撃されて全村一べんに停電した事があった。私達七、八人は、そのまま出られなくなった。空襲下でろうそくなどつけれないから二時間位もお湯につかっていたが、だれも湯あたりしなかった程ぬるいのである。出れば寒いからろくに洗ひもしないし、髪など先生に注意されなければ洗わない。頭髮の虱はもう十月頃から湧いていた。女の子どうし虱の卵のとりっことはよくやつたし、毛糸の手袋をはめて耳の後の毛の中を二、三回こするとたいいて二匹位虱がついて来た。柴田先生も手があくときよくすき櫛をもって女の子の髪をすいていた。

十二月の雪が根雪になり、お正月三日間は吹ぶきだった。針のような粉雪がサラサラと休みなくふりつづき廊下のガラス窓をだんだんに閉ざして行つた。純毛製品の少ない頃で、皆どうにか着ていたが栄養不良の体には辛い寒さであった。朝、玄関の柱のところの大きな寒暖計はたい抵氷点下10度、大寒中には15度の日が十日間続いた。浴室から下げて出た手拭は部屋に着くまでに凍っていた。

前にちよつとふれたHさんが病気になるのはこの頃だった。どこが悪かったかよくわからないが、体にせよ、心にせよ弱いところがあれば負けるのが当然のような生活であったといえる。例えば、育ち盛りなのに私の体重は疎開生活中29kgと30kgの間を上下するだけでとうとう上昇線をたどらなかつた。

Hさんが病室へ入ってから一ヶ月位してから五年女子にちよつとしたさわぎが

おこつた。前述のように当時Hさんは級の皆に白眼視されていたから誰もお見舞にゆかない。それを山岸先生に指摘されたのである。気に喰わない先生が気に喰わない人間の味方をしたのが皆の反感をおこした。「友達の見舞にゆくのはあたりまえだ」と先生が言い始めたとき、



五、六人が一緒に声をはりあげた。「耳ノカイシャノ定休日」全員がこれにつづいた。「キカイガコレテガツチャガチャ聞イチャアイナイン スーイスイ。」

先生の顔がこわばつた「おもしろい、もう一度言ってみろ。」そこで私達は全員声をそろえてもう一度やり直したのである。それからどうなったかおぼえていないが、何でもその晩皆でぞろぞろと病室へ押しかけ、その手前の部屋で受験勉強していた六年女子に攻撃された。「今までほうつておいて今頃ぞろぞろ押しかけるなんて！」といわれたが、これは六年の方が正しかったようだ。

お正月少し前に三度目の部屋替があつて、私は別館の五号室になった。四号に三人の女子と柴田先生が入つた。それも何となくうれしかったし、閉じこもりがちな気候の故もあつて、わり合落着いて暮した時期であつた。生徒と一部屋に寝起きすると、先生もいろいろな気をつけなければならぬ事が多かったであらう。

う。ある時、鶴田さんがそつと私に教えてくれた。「あのね、紙くずかごに吉田先生からの電報が入っていたの、五〇〇〇クレだって……」。十九年春五年男子担任から不意に軍属としてサイゴンへ行った吉田先生と柴田先生の愛情問題については或程度父兄も生徒も知っていた。だがこの電報の存在は不意に大人の世界のむずかしさをのぞかせた。大好きな柴田先生のことだけに、妻子ある吉田先生との何か不純さがつらくて、二人ともそれ以上誰にも、またお互いにも話しはしなかつた。

(五)

三月九日、六年生が卒業のため東京へ帰つた。六年生の弟妹たちはかわいそうだった。夜七時半頃六年生が発売してしまつと皆涙をポロポロこぼしていた。翌十日の明け方、六年生たちは大宮附近で真赤な東京の空をみた。三月十日の空襲であつた。

それから二週間後、東京から第二次疎開の子ども達がついた。閉じこもりがちな生活と硫黄泉のためにすっかり色白になつていた私達の目には皆真黒な顔にみえた。今度は二年生から疎開がゆるされていた。今の二年生よりはるかになりは小さかつたであらう。生まれてはじめて親元をばなれて幼ない顔を緊張させているのが、私達の目にささいじらしかつた。同じ汽車で私と前述のHさんにそれぞれ父親が迎えに来ていた。私は北多摩の奥へ、Hさんは宮城県へそれぞれ家庭疎開のためであつた。以前から手紙で知らされてはいたもののいざとなると私は何

となく帰りたくない気持ちが強かった。強いきずなで仲間と結ばれてほけなないといったらよいであろうか。そういう立場になったとき帰らなかった子さえあつたのである。三月二十四日の夜、私は心を残しながら別所をあとにした。西田校はそれから十日後全員別所をひきあげて再疎開した。すぐとなりではあつたが、依田、長瀬、塩川三ヶ村のお寺にわかれたのである。それから終戦を経て秋に帰京する迄の八ヶ月の方がよりみじめな暮しであつたらしい。もう温泉もないし、食糧の欠乏はますますひどくなつていた。養蚕地帯であるので、よくかいこのさなぎがおかずに出たという事だつた。今ならばとても食物などとは考えられないであろう。

楽しかった思い出もないわけではない。だがここに書いたのは辛かつた事の何分の一かである。各人が各様に体験した疎開の辛さはいくら書いても書ききれぬものではない。ともすれば楽しいなつかしい思い出となりがちなの貴重な体験を今日に役立てようと思つたら、なつかしい思い出などと呑気な事をいつている訳にはゆかないのだ。子どものしあわせの基礎という事をもう一度しっかりと考えるおし、そのために各自がなし得る事を着実に行なわなくてはならない。それが今でなければ間に合わないという事を肝に銘ずるべきである。長々とつまらぬ話を書いたが、明日の子どものために、日本のために、何か考えていただけたら幸いである。

騒音公害、そして...

高砂市

小川 倍 恵

八月下旬から夫の父が脳軟化症で、意識不明のまま入院しております。私は看病人の弁当作り、病人の洗濯物のしまつ等手伝いのため宝塚の夫の実家に来ております、三児をつれながらのこの世話結構忙しい毎日です。それよりも、ここでは飛行機がおそろしいほど低飛行し、三男がとてこわがり、それが通るたびに遊びを中断して、こわいものに追つかけられているような格好でギヤアと泣きながらやってきます。その都度私も仕事を中断して彼を抱いてなだめてやらねばなりません。私でもあのキーンという金属音はかすかな記憶ですが戦争中の防空壕へ入った時のおそろしさを思い起こされ背すじがゾツとします。午睡させていても、夜八時頃寝させても、やはりこの

騒音で目を覚ましてしまいます。これも慣れてくればもっと落着いてくるかもしれませんが、こういふことに慣らされてしまふ現代の子はかわいそうです。いづれ父も意識が回復すれば自宅静養するようになりますが、こんな騒々しさではまた再発しそうです。私がこの家に嫁いだ七年前は県道から少し入った静かな住宅街でとてもよいところでした、ところが年々空はこの通り、裏通りへは大きなダンブ等が通りすごい振動です。どうしても病人に悪ければこの家を売り他へ移転すればよいという方法もあります。しかしそんな事の出来ない沢山の被害者がいる事を思うと自分達だけ逃げてはならない、何とか地域ぐるみで協力し合つて元の静かな街にしなければ、と、また私の悪い血がカッカとしてきます。今まで私は静かな田舎に住んでいましたし、一ヶ月に一度ぐらいここへ帰つてくる程度でしたので「ちょっとうるさいところだな」と思うだけでそれほど苦になりませんでした。がこの一ヶ月生活してみてもはじめて被害者の方達の〇〇運動等を起こされる気持ちが理解出来ました。報道機関で見聞する〇〇大臣の現地視察などでわずかな時間そこに立つてみて、「ホホウ、ほんとにうるさいですね、よこれていますね。」等と言われても本当の姿はわかってもらえないのではないかと思います。いつか耳にしたことですが、静かな住宅街に高速道路が通り住民は排気ガス騒音になやまされながらどうする事も出来ずにいる時、ここにあつた知事私邸はいつの間にかどこかへ引越してしまつたそうです。そ

することの出来る人はよいのですが、そういう出来ない人の方が多いのが現状です。こうした上に立つ人がこんな環境に住んでみてこそ住民本位の政治が出来ると思っています。騒音公害に限らず、老人、身障者等福祉問題に関しても、自分の身内にそういう人がいたり体験したりすれば身にしみてわかつてもらえ、もっと本當の福祉も向上するでしょう。私も今まで福祉事業にたずさわつてきていながらも一歩というところで理論的にしか福祉を理解することが出来ませんでした。しかし父の病氣によつて身にしみて諸々の事を考えさせられました。また十月から医療費値上げが実施されます。それには他に理由があるかと思いますが、129号「医者に御用心」を拝読してから関連して考えると、この値上げは、また子息達の入学寄附金につき込まれるのではないかと、結局国民にしわ寄せが来ると思うのです。これは素人的考えかもしれませんが、戦開用ジェット機を少く（いや、なくせば）私学にも国立なみの補助が出来、寄附制度がなくなる、福祉にもまわされる、そうすればこんなにもどんどん値上げしなくてもよいし、我々が安心して信頼出来る優秀な医者も育つのではないかと思つたりします。交通事故で大黒柱を失つたり、長期治療のため生活苦と戦っている人達の多いことも新聞で知りました。我が家だっていつそなるかわかりません。こうした不安と公害に悩まされている国民のことを考えて何とかしてほしい、そして私も何かをやりはじめなければと思うこのごろです。

36才のゆううつ

川西市、十日市、睦子

金木犀の強い芳香がただよってくる。

手入れのいきとどかない庭にコスモスが咲き乱れている。このコスモス、いつか「わいふ」のバザーの時、その種を買い替えたもの。それ以来、毎年忘れず咲いてくれる有難い花である。前と隣の空地にはすすきがいつぱい。二、三日前、近所の人が云った。街中ではすすき一本三十円もするんだって。ここの切つて十円で売ったら。そうでもしなくっちゃやっていけないんじゃない、十月からの値上げラッシュ。――全く。

自然は秋たけなわなのに、その風雅を楽しむ気さえ起らない住みにくい世の中。

連休の一日、高校の同期の同窓会に出席した。十七年ぶりである。集まったのは七十名余り。昔、旧制中学とやらで、私の入学時でさえもどうしてか女子は男子のすしかとらなかつたものだから、会場で会わず女性の顔には、少々太ったりしわが増えたりしていても全部見覚があつた。天はいつまでたつても不公平で、男の子にやんやといわれた美人は相も変らずきれいだし、なんとなく品のあつた人はますます磨きがかかっている。

「よう、口の悪いの元氣か」と後ろから声をかけられ振りむいたら、中年のおっさんタイプ。

「いやあ、なにそのお腹、中年ぶとりもいいとこ。そんなにお金たまつたん。まあ、お親父さんに声をかけられたようでぐつと安心やけど」てな調子でとび出してしまふ私。少しはええかつこうしようと思つていそいそと出かけたのに、もうあかん。かつこうつけるのなんかやめたやめた。男女ともほとんど大学へ行くのが当り前というふうなムードの学校だったから、私のように就職というのは極く少数しかいなかった。だから今や、まあ一流企業の中堅社員に片足を入れたのやら、大学病院などで教授の顔色をうかがっているのやら、社長と云えどもまだ波の間に間にただよい浮んでなんともばつとしないのやら、男性はざつとこんなところ。女性はいえ、女学院出はいまだに私にとっては鼻持ちならぬ奥様連になつていて感じだし、何のために大学まで行つたのかと疑いたくなるような教育ママへの変身組。学校の先生と、当日来ていなかったが、小児科医として淡路島で活躍している人とか家庭と仕事を両立させているぐらいいなにはほんとうにびっくりした。薬大へ行つた人もずい分いたのにこれ全て嫁入り道具の一つだったのだらうか。友人Tは全くその一人。医者のおととお見合して結婚。今、旦那はある病院の小児科部長。マンションを建て、

旦那の月給と同じ位の家賃が入るような体制を整えたので旦那がポツクリ死んでもいいのなんて云つてのけるみことな手腕。在学中それ程親しくなかつた日（奈良女子大）と話し合つたら彼女いわく、「学校出る時、先生になる自信なんて全然なかつたのよ。だから……」そして十才年上の人と結婚し、御主人の両親とお姉さんと彼女達親子四人が一つ屋根の下で暮らしているという。

「なにしろ七人分の食事でしょ。少し安いもの買うのと買わないのとで随分違ってくるのよ。だから毎日、自転車で買い出しに行くの。私なんか能力もないし……」といとも謙虚。

当日の、会費三千五百円と時間的なゆとりのある人間の出席者というのは分るのだけれど、どうしてこうものんびりかまえていられるのだらう。いつまでたつても自分の行く道を見つけないとあせりもがいてる私はまるで滑稽。全くしらけた感じ。

二次会に同級生のお姉さんがやつているバーへ行つた。一度は立つてみたかつたカウンターの後には三時間程立せてもらつて機械嫌だつたけれど、ついうっかり「この頃いらいらしてゐるね、家庭なんてこわしてしまいたい心境」なんて本音を口すべらせてしまつたものだから、舟木さんよ（私の旧姓）、あんた女に生まれたんやろ、そしたらしゃあないで。女は家に居る方がしあわせと違つか」と云つたのは会社を作つて二年目の社長兼〇〇兼××兼という男。彼はしんどいやろ、でもやっぱり、女心をわかつ

ちやくれない野郎の一人。

「何もそういららせんでも。子供が大きくなつてからでも遅くないのと違つか」と有閑マダム。「でもいまこの時期にやつかんとあかん、やりたい自分だけのこつてあるでしよう」とは云つてはみたけれど白けた感じ。もうやめた。36才にして悟りもひらかれず、自分の能力を客観的に見もしない方がおかしいのかもしれない。

「ねえ、ゴーゴー踊りに行こうよ」中に遊び人がいて、話はすぐにまとまる。でも実際行つたのは八人。

陽気なリズム。鳴り響くエレキ。陶醉出来ればこれ程いさ晴しはないと思ふのに、踊つてはいるものども白けている私。思い切りの悪さというか、気分転換の出来ない性格つてずい分不幸だなと思ふ。そうや、子供や夫、家庭というものにすぐいらいらするのは、この気分転換のまずさも大要素。ゆとりがないと云われて旦那と大げんかをしたゆとりというのはこの事なんやとはたとえず。もがいてもあせつてもどうしようもない時期というものもある。とは思ふもののやつぱりすつきりしていない。

それにしてもこの間の例会の時、斎藤さんの云つた「育児なんて済んでしまえば大したことなかつたわね」という発言、私は彼女とは違ふんだな。私にとってはこれから始まる氣がする。私自身の生き方、考え方のあいまいさ、いいかげんさが、これから子供との係りあいの中で問い正されていくのではないかしらと思ひ、

おたおたしている。これもゆうつな事の一つ。

あれやこれや思うと、コスモスがゆれ、すすきが波打って秋晴れなのに、うつとつしい。

+++++

【表紙絵の言葉】

松 茸

神戸市 平田 恵美子

秋は、いろいろな木の実や、果物がにぎやかに回り、見ているだけで、楽しい季節です。

ふつくらしたつばみの松茸、開いたかさの美しいひだ模様など、山のおいと松茸の香りにひたりながら、心ゆくまで描いてみたいものと思ひながら、今秋もかなえられそうありません。

森林の乱開発で、年毎に減っていく松茸も、最近では人工栽培が試みられていると聞きます。それだけに、よけい、自然の造り出したものを、手にとり、眺め、そして描いてみたい気持ちにも、かられるのです。

松茸狩りに、有馬の赤松林の中を、はしゃぎ回った一昔前の秋の一日が懐しいです。「松茸って食べるものなの。」とたずねる子どもには、語ってやるしかできなくなっていました。

この表紙絵は、古い写生帳からのものです。

近 況

南河内郡

土 井 邦 子

今月のたけのこ例会は、生活評論家の水島照子さんを講師として、女性の生き方」といった内容です。狭山町教育委員会は町立の幼稚園の母親達で、家庭教育講座を開くので、毎年、新しいグループが生れています。

「たけのこ」は、一応一年間の講座をすませその後も続けていこうというメンバーで、今年、命名、(あまり意味のない名前)、三十名います。狭山ニュータウンは新しいので、「たけのこ」の他に、一年先輩達の「五月会」があり、現在幼稚園児をもつ方達の講座があるわけです。今年、やる事を一応決め、去年のように、講義を受けるだけでは面白くない、後の話し合う時間を多くとりたいたいという意見も、とり入れて、予定表を作りました。

さて、今日、水島照子さんのお話に、皆心のすみに持っている、主婦であると同時に社会とのつながりを深めたいという気持ちを強くした様です。労力銀行の話なども出て、こちらの方に、かなり興味を示した人も多かったようです。

私は、「わいふ」を知ったおかげで、最近では、少し積極的になってきたようです。

水島さんの話に新鮮なショックを受けるより、自分の人生感、まがっていいという、自信が、持てました。そして、やっぱり、何事もまず、やってみるということが、重要だと、わかりました。子供に何にもしてやれない、ふがいない親かもしれない。経済的事情で子供の望みをかなえてやれない親かも、しれない。そのかわり、いつでも何かに熱中できる親になりたい。情操豊かな人間になつて欲しいから、まず私が、美しいものを、素直に美しいと感動できる心を持ち読みたい。そんな事を、いろいろ思ったわけです。

この頃、心にゆとりができ、今まで、子供の事を考える時間が多すぎたとまで、思うようになったのは、長女が夏休みみどころからとても元気になり、性格も明るく、はつきりしてきたからです。去年はあんなにメソメソしていたのに、やっぱり強い子に、あこがれるのか、いつも、そういう子の話しばかりです。それで私も、ほとと肩の荷がおりた感じで、子供に占められていた、頭の中が、広くなったみたいです。すえつ子も十一月には三才になり、育児の一くぎりがついたみたいでヒステリーも起きなくなったから、たいしたものです。

騒々しい夕食の時など、子供どうしの話を聞いていると、三人、産んでおいて良かったと思う事がしばしばあります。姉弟で、なんとか、助けあっていくだろうと期待しているわけです。

近頃は、投稿するのが恥かしくて、今まで何であんなつまらないもの、どんな

ん送ってしまったのかと、読み手専門になつてしまったけど、やっぱり、書いてみたくなりました。

【お便り】

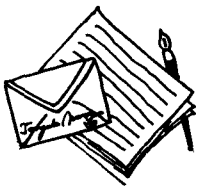
福岡市 大庭 陽子

いつも読むばかりで書きたいとは思いますが七月よりパートで仕事をやっていますので毎日疲れてしまい、まとまりのないものしか書けそうにはありませんが女性だけの職場でのこと、胸にいっぱい書きたいことがたまっています。

先月号の血液型のこと、とても面白く思います。本で血液型の性格を知り、興味がありますので……。

私はA B型、熊見さんの書かれている本ソックリです。

仕事をしてますと一日がアツというまに過ぎますし、陽の暮れも早くなり、ものがなしい季節です。良く食べて元気で活躍して下さいませ。



リレー随筆

近頃、父親に連れられて来院する子供が増えて来た。

大層、可愛いらしそに、子供を抱きかかえて、注射のあとを揉んでやっている父親の側を通りながら、その子供へともどちらへともつかずに、「今日、パパはお休み？ ママは？」と一寸遠慮がちに聞いてみると、「この子の熱が高いので、会社を休みましてん。家内は待合室にきています。」とのこと。

「はしかは済んでいますか？」「さあどうでしたかな。一寸家へ電話して聞いてみましょうか」等というのはよくあるが、先日、「子供のほしかで、私も五日休みました。」

会社へ出す診断書を書いてもらえませんか。」と言うのが聞こえた時は、さすがに驚いてしまった。これが、よく言う、マイホーム主義というのだろうか……

男というものは、家庭を守ろうとする本能の他に、家庭以外の所に情熱をかけるものだ、長い間、私は信じて来た。それが仕事であっても、思想の爲でも、又探検や、学問や芸術を求めた爲であったとしても……。

そして女性も、夫の出世のみを唯願ったり、子供を一流エリート大学に入れることのみに専念せず、未来に社

会的な美しい希望と欲求を持つべきだと思っていた。

が、こんな風だとつくづく考えさせられてしまう。

父親の子連れ来院にもいろいろある。一つは共稼ぎの場合、これは仕事の性質や立場で夫婦の間で定められるのだろう。まだ保育施設の揃わない現状では、父親がかり出されるのは仕方ないことかも知れない。二つめは、近頃多くなった核家族。

小さい子供が二人、三人と続いて病気をした時、父親の協力がなくてはとう仕様もない。でもこれには、母親の工夫もい

小さな窓口で

明石市 田和明子

と思うが、その時、父親が一体、頭の中に何を想っているのが問題。

そして三つ目は、いわゆるマイホーム愛着型、妻や子供の幸せの爲には、仕事も社会も何のそのという分。大きな子供をおぶって汗だくでお出ましになる。

同じマイホーム主義も、この数年で、一寸姿が変わって来た様にも見える。

芝生の緑も鮮やかに、赤屋根と白壁のこじんまりとした家、お姉ちゃんの弾くピアノのおけいこの音が、平和に流れて来る中で、ペランダの夫は、ゆっくりとパイプをくゆらし、その横には、赤ちゃんが、暖い光を浴びて、すやすやと寝息

をたてている。もうすぐ、その愛する家族の爲に、妻のつくった美味しいケーキがやき上って来る頃だ。

以前はこんな夢を求めて、唯ひたすらに努力を重ねる夫婦が、この新興地にも、多く見られた。

所が近頃は、そんな欲望ばかりを開発して行く現在の社会の中で、現実には、どんどん上る物価に悩まされ、勤めの方も欲求不満で疲れてしまい、家とか、土地とかの話題は、むやみにマイホーム父親を傷つけ、唯、母親をいらだたせる。その時、弱くなった父親は、せめて、家族からはずされまいと精神的な面で一心に奉仕するのだろうか？

それとも期待出来ぬ社会への心の逃れ場として、必死に家族を愛してみるのがだろうか？

そういえば、心因性の慢性下痢で苦しんだり、異常に過敏になった神経で心身の疲れを訴える、中高年サラリーマンもふえてきた。

一寸した風邪でも、診断書を欲しがり、勤めを休もうとする若者も多く見られる。そんな無気力さは、どこから来るのだろう。こんな善い人達みんなが、心から目を輝かして働ける世の中に、どうにか早くなって欲しい。

今、受付の小さな窓口で、私はこんな事を一人願ってしまっているのです。

※次号は東京の竹村たか子さんにお願いたします。

ほのぼのした話

池田市

日比野 都 (53才)

私の家庭は、私と息子のふたり暮らし

なので、一人で晩ご飯をボソボソ食べてもおいしくありませんので、たいていは本を読んだり、新聞を読んだりして、帰宅時間のきまらない息子の帰りを待っております。そうしたときに、ふっとこんなことを思い出しました。

今年の六月九日の日曜日の事です。豊中の婦人会館で「ひととき会」(朝日新聞のひとつとき欄に掲載された婦人たちが、作っている会)の例会がありました。浅野さんという仲間が、豆ご飯をいっぱい詰めた重箱と、玉子焼や椎茸や高野豆腐などの煮物を詰め合わせた重箱をひろげて「どうぞ召上って」といってくれました。たいていの人は弁当持参だったのですが、中には持つてこなかった者もいて大喜び、ワイワイガヤガヤと馳走になりました。ずうずうしい私は、ご馳走になった上に、残っている豆ご飯やおかずを目を付けて、その晩は息子が出張で留守だったので、晩ご飯の仕度をさばるべく、「晩ご飯用に、それ貰って帰るわ」と、自分の弁当箱の空がらに詰めさせて貰いました。

浅野さんは目を細めてうなずいてニコニコ「お弁当作るのに夢中でねえ、せつかく作った入れ歯をはめてくるのをすっかり忘れてきちゃった」と、いかにもはずかしそうに、すばめた口到手を当てて

笑いました。

そのときの様子を、おぜんに頬杖を置いておもい浮べて笑ったというわけです。おもいだしたところで彼女に通じるわけではなし、おそろじや、一筆書いたらいいじゃんか、それがいいそれがいいとおぜんを叩いて、ニヤニヤニヤニヤ、葉書にその旨を書いて出しました。

十日ほどたって彼女から小包がきました。中に手紙が入っていて、いわく「あの豆のご飯のこと憶えていて下さってとでもうれいす。入れ歯を忘れた甲斐がありました。この夏、日向の母の許に十日ほど帰りました。椎茸をみやげにもらって帰りましたので、坊ちゃんにおすしでも……」

九月なかばの出来事です。いまだにほのぼのとしております。



墓参り

高槻市 吉田 てる子

9月23日

お彼岸、予定を立てながらもお花を買っていない事が気になったけれど朝一番に花屋さんへ行こう、と思って部屋に入った。

主人が「隣のステレオうるさくてねられない」「今時分に何時だと思ってるのかしら、十一時十五分」

常識のないのに程度あると思っただけ私の耳には聞えてこないのです。ままフトンの中へ。ああ、やっぱり何か聞えてくる、ひびいてくる。ステレオだなア、よし今すぐ行つては駄目、もう少し辛抱してから十一時三十分。ねまきのまま起きて早速隣の借家へ、

「今晚は、お宅ステレオならして居られるようですね、私の枕元でなつてるようでねられないのです。もう時間もおそいこととすし、とめていただきたいのですが」「ああ、どうもすみません」階段おりるまにとまってしまった。やれやれこれでねむれる……と思っただけれど、十二時、一時、二時になつてもねられない。

「いわなかつたほうがよかったのではなにか、こせ／＼とうるさいなアと思われしていないか——なに／＼言つたほうが

よかつたんだ——

こんな思いがきり／＼まいをしているからねられないのかも……やがてう／＼としたと思つたら、「今日は彼岸だ、墓参りに行かなくちゃ、花買ってあるのか」

「お墓参りに行くの、珍しいこともあるものだよ、どういった風のふきまわしなの」

花がない。「今日はもんだというのに花はないのですか」「いいえ、あるのですけれど高くて気の毒で」「高くても仕方がないわ、墓参りに行かなくてはならないもの」

色花三本、下草三本、計五〇〇円。
「毎度すみません、高くて」馬鹿らしい。

主人、昨日休みで家にいたくせに山へ行つて下草でもとってきてくれればいいのに、何してたのかしらと腹立たしきでいっばい。「これだけで五〇〇円よ、高くて話にならない」「ほう、山へ行けばなんばでもあるのに」「わかつてるの」「高い／＼といつて供えてもよろこばないよ」

田圃道を自転車走らせながら墓地へ、稲も中稲なのか色づいてる。

気持がいいなア、野菊も咲いている。まじじいしやげも、つゆ草も、田舎へ行けば、田圃のあぜに何気なく咲いている花でも、私達にとっては久しくお目にかかれな。坊さんに墓守りをして頂くのでお米一升もつて縁先において水をいっぱいもらつて花を立てかえる。墓石のまわりを主人が念入りに掃除をしている。

「お彼岸だのに坊さん墓の掃除位しとけばいいのに大きな顔して年貢をとつておきながら」6本の花筒に小さく花をちぎつて供えてフツと隣の花筒を見ておどろいた。

まんじゅしゃげとつゆ草野草が、形よく
さしてあるではないか。

「一寸お父さんお隣見て、あの花」

「へえー、珍しいなア、野草がさしてあるなア お前みたいに五〇〇円の花が高いとこばすよりも、こうして道端に咲いている花でも墓前にさしてあると何だか香気がただよっているみたいだなア」

「お墓へ参って供えようという気持をよろこばないおねえ、お父さんみたいに久しぶりに墓参りする人おねえ」

お隣の墓石にも水をかけて手を合わせた。
よろこびなさい

まんじゅしゃげでもつゆ草でも

美しい心ではないか

高い／＼と買って買った花を供えるよりも

家へ帰るなり、私は早速この気持を書いた。ちらしの裏側に。原稿用紙を買いに行っている間に気持に雑音がいいるので……この失礼許して下さい。



【お便り】

大阪市 永堀のり子

わいふの皆様、本当に長い間御無沙汰して申訳ありません。この三年間読み手ばかりで過してしまいました。

毎月わいふが送られてくると、家事もそつちのけでページを開きます。特にリレー随筆は楽しみにしています。又、九月の例会には十人もお集まりになったとか、報告を読んで、その時の様子が伝わって来るみたいでした。

その中で小学校四年まで満洲に居られた果山さんの言葉「私には帰るふるさとながないです」私はそこを読んだ時、まるで子供時代の友達に逢った様な気がしました。私も小学校六年まで満洲で育ったのです。

中国展に行った時、まっ先に中国の地図を買い、家に帰ってすっきり呼び名が変ってしまったふる里を手でたどりながら、美しい地平線を想い出していました。長い間ペンを取る事をすっかり忘れてしまっていた私でしたが、あのひと言がきっかけで、久しぶりに下手な文章ですが、手紙を書く事が出来ました。

編集をされている皆様、ありがとうございました。

枚方市 川中 重雄

近頃の表紙絵は却々お上手な人が出て来たものだと驚いています。天分というのか、努力というのか、其の辺は私

には薩張り解らないのですが、昔、吉川英治さんが、文章は勿論、絵も却々素晴らしく巧みでしたが、其の吉川さんの画と一寸似たところのある表紙画に接して、これは大変な素質の人だと思っています。文章は、本を沢山読むことと、足で歩くことでひとり書くことが頭に浮んで来、何とかなるものだと思っていますが、絵は沢山眺めたところで、そういう訳には行かないものようです。私も何辺描きかけたか知れませんが、どうしても人に見せるような絵にはならない。この点は何時まで経っても小学生級です。だから余計に上手なものには感心してしまうのです。

絵と字は天分と努力とが半々に、人間は持つて産れて来ているのではなからうかと、私は時々思います。天分のないものは、ある人よりは倍額の努力をして行かなければ物にならないとも思い、其の倍の努力をするためには、相当なる犠牲も払わなくてはならない。其の根性のあるかないかが岐路となるものだろうと、考えています。

其処で、何ぼやってもあかんもんはあかん——やめておこうというのが賢いのかも知れませんが。私はそれです。

【住所変更】

●片山喜久子 〒651-11 神戸市北区山田町小部出坂山14-87 Tel 078-593-3711

●荒木弘子 〒157 東京都世田谷区祖師谷3丁目39-10

●石黒靖子 〒063 札幌市中央区南二条西26丁目 美山マンション24号

●十日市公子 25, Fisherville Road, Apt. 901, Willowdale, Ontario M2R 3B7, Canada.

●池 容子 〒590 堺市庭代台3丁目13番3-101

●門田あきみ 〒591 堺市日置荘西町711-53

●児山玲子 〒274 船橋市松カ丘2丁目36-4

●野波志都子 〒790 松山市桑原町938-1

●新入会員 浜谷美枝子 〒665 宝塚市仁川高台1ノ二ノ四

●退会者 横田悦子

●加藤良江

●郵便戻 丸野美津子



あるある青春 (33)

大阪市 津堂 健治

健治の日記より

三月×日

帰省して三日目、母校の中学校を訪れる、と言っても校庭の片隅で森閑とした校舎を眺めただけ、休暇中だから当直の先生らしき人を見たが、自分の知らぬ顔だった。

三月十×日

午前中弟と近くの公園でキャッチボールをする、弟の投げる球の意外にきついのに驚く、午後は「無機化学」の整理、夜読書しようとしたら又も警報のサイン、面倒臭いから早寝。

三月十×日

江口太郎より便りあり、一、家族等も軽井沢へ来た由、一、俺のテニスの腕前は半信半疑で、松山としては其の後一向に現われぬとか、一、上京の途次立ち寄って呉れ。

三月××日

硫黄島に次いで沖縄まで米軍が上陸してきた。帝国海軍も脆い、海軍は陸軍が援助せぬと言ひ訳をし陸軍は海軍の非力を責める、何れにしても暗いニュースだ、空襲は更にひどくなるだろう。一昨夜は大阪にB29約九〇機が来襲、物凄い焼夷弾の洗礼を浴びせ市の中心部阿倍野区住吉区天王寺区は全滅とか、被害は未曾有のもので、焼夷弾の敵一機あたりの搭載量十トンとして計算すると撒かれた範囲から一戸平均四〜十発の弾丸が降った割合

になる。我が家も直ちに疎開を考えなくては。きだ。

三月××日

昨日中に各教課の整理を終えたので父と弟で近郊の堤え食餌用の土筆採りに出掛ける。往きは元気だった父に安堵し土筆が目ざぐる一杯になるまで弟と採りあっていたが気づくと父は土堤の中腹でグツタリしている。

「なに、春の陽がボカボカして気持ちいいので眠っていたのだ」心配して近づくと、にっこりするがやはり大儀をおだ。

帰途、父の足どりにあわせて歩いたら「学校の成績は大丈夫か」と問う、「まあまあだけど、夜は灯下管制で思ひ通り勉強出来ない」「そうだろう、だが誰しも苦労は同じだ、しっかりやるんだな」父はそれきり無言になった、戦局について何の意見も吐かない。

四月×日

愈々休暇も終り、どおやら「アカガミ」は未だの様で最高学年に進め、卒業の可能性も大きくなる。このまま星章を戴かずに卒業免状を手に入れられそうにも思える、それから更に進学を……だが樂觀は許されない、現状は極めてシビアだ。上京の切符を求めて神戸駅へ行き帰りに市街を歩く。相変らず軍人が多い。予備学生らしいのにも出会ったが、今回は浅田とも対面出来ない。彼や吉江は、今

何処に居るだろう、不吉な予想だが酒巻同様還らぬ人になったのではないか。気がつく酒巻の実家の通りを歩いていて『酒巻鍼灸院』のうす汚れた看板がみえた。

健治が上京した四月七日は快晴だが風

は強い。暫らく離れていたマンモス都市は、もお全くの廃墟で、久しぶりに逸川と会って異口同音に発したのは、「まだ生きていたのか」と言うのだ。

「草津でスキイは滑れたかい」

「堪能する程やったがアレが最期だろうかな」

「どおして」

「何となくそんな気がするのさ、それに今朝のラヂオで小磯内閣が総辞職し次期内閣に期待するとか言ってたけどぜんたいあの内閣は何をしたんだろうネ」

小磯政府は呆気なく崩れ、新指導者鈴木貫太郎首相に国民は、どの様な希望を託せよう、「戦局意の如くならず」してバトンタッチしたとあるが今後にどんな明るい材料があるのか？

今や意の如くならず退陣した国家指導者の為に若く多数の生命が断たれているのだ、老政治家は失敗すれば隠棲すれば良いかも知れぬが戦線の兵士達に交替は無い、失敗は即ち「死」である。

内閣は東條小磯から鈴木老將に移っても戦局は後退するばかりで国民を鼓舞するイスマが無く負担を超えた義務を強要する。

「鬼畜米英もし本土上陸し来れば一人一殺、竹槍をふるって戦ひ、神国を守護す

べし」とは、陸軍当局の声明だが、もはや国民は心を動かさなくなっているよう。

新学期を迎えた津堂健治に手紙が届いたが差出地は長野県の追分となっている。

前部略——私は筆を持った経験が乏しいものですから私の気持をそのまま述べる自信がありませんけれど「軽井沢」での貴男のお言葉に何とか御返事申しあげねばと存じ此の手紙を差し出します。でも、あの折、「有難いと思ひます」と申したのがすべてかも知れませんが、勿論それでは余りに抽象的でお判りにならないと存じますので、くどくど説明しますよ、私の過去をお話しした方が良いでしょうのです。

此の後、彼女の生ひ立ちが綴られていたが要旨は、ざっとこうである。

松山との父親は木曾節で知られる木曾福島町、材木問屋の総領息子だったが親の許さぬ女性と関係した。因襲と外聞を憚る両親の怒りに馳け落ち同然の果て子供が出来たが産後の無理で母親は他界、生活力の無い夫は嬰兒を伴ひ悄然と実家へ戻ったが、曰くつきの彼等を遠縁にある追分の未亡人の許え有無を言わず嫁入りさせた。追分の婦人には三才になる特異な男児があり伴れ娘はその時から未来を約束される条件だった。やがて再婚の二人に女兒が誕生したがそれが妹のくみである。

私には物心ついてから遊び相手は動作のひどく緩慢な彼しかなかったのです、

他の子供殊に男の子と遊ぶうとすると母親はきつい目で叱つたものです、彼は小学校に上る頃に腰から胸まで支える固いコルセットをしていました。私は半ば人形の様に不自由な彼の世話ばかりして幼女期を過ごしました。母が何故、こんなに彼許りに仕えさせようとするのか恨めしくもあり不思議でもありましたが、酒好きの父が肝臓を病み悪性の貧血で死亡した際彼との未来を知らされ父を失った悲しみにもまして、お膳立てされた哀れな私を嘆いたものです、少女期にあった私は農業を煽って自殺をはかった事もありました。

としが女学校三年生の折、彼は高峰療養所に入院している、もはや自宅療養では覚束なくなつたのだ。

私は、ホツとしました、彼から一応解放されたのですもの、思ひきり青春を楽しもうとテニスをやつたのも此の頃です。けれど父を失つた松山家の窮乏はひどいものです、猫の額の養蠶の桑畑は母一人で充分でしたから私は外働させねばなりません、彼の療養費と妹を学校にやる為にもと東京へ働きに出たのです、髪結ひの見習ひとして懸命に勤めました。妹は無事女学校を卒え、バス車掌に就職しましたが私の方は戦災にあつたりの不幸があつて食堂のお手伝ひになつたのです。でも、最近母は老ひの身から桑畑の仕事が私がやらねばならなくなり、彼の容態も思わしくなく、週一、二度は高峰の療養所に世話をしに参ります。

これだけお知らせすれば私の立場が判り願えると存じます、ですから私は「有難い言葉」とそれしか御返事申しあげられないのです。

軽井沢では愉しく遊ばせて戴きました。良い想ひ出になる事でしよう、江口様にも宜しくお伝え下さいませ。

(つづく)

【お便り】

高砂市 小川 倍恵

真赤な彼岸花が咲き並び、いよいよ私の大好きな秋がやってきました。

皆様毎日御元気で御活躍の事と存じます。毎月わいふ楽しく拝読致しております。

誌代を早く送らねばと思いつつもこんなにおそくなつて申しわけございません。

毎月わいふを手にするたびに新しい刺激を受け私も一筆と思うのですが、そのうち雑事にかまけて日が経つてしまします。

それに皆様の名文に圧倒され書きかけても途中で投げだしてしまつたり、しかしいくら気負つてみても所詮私には幼稚な文しか書けないのだとあきらめて私の最近の感じた一端を書いてみました。

皆様御身御自愛の程御活躍下さいませ

秋のおとづれ

枚方市 重川 雄

一、 来客

事務室はクーラーのお陰で、どんなに暑い日だと云つても、汗はむようなことは、減多になつた。それに引換え電気料金が値上げされたと言ふことが気になつてと云うのは一寸嫌らしいけれど、家に帰ると余程の客でない限りクーラーは使わないことにして、扇風機で間に合せてしまふ。そうした嫌味も九月になると次第に気にしなくてもよくなつた。

もともと、長尻の客は、私ははじめから嫌いなのだ。別にこれと云う程の用件もないのに、じつと坐り込んでいる人程嫌いなものはない。と云うのは、日曜日は私の一番忙がしい日であるからである。一週間滞らせた整理を、日曜日に全部取片付けてしまわなくてはならないからである。

そんなとき、一寸した用件を持込んで来た人に、涼しい部屋など提供すると、何時までも坐り込まれる。それが私には一番苦手である。こちらは忙しいのだから早く切上げて呉れとは言えない。何かなし果然と其の人のお附合いをしていなくてはならない時程、苦しいものは、他がない。

そう云うものであるから、私は人を訪問するときは、何よりも先に相手の立場を強く考える。だから用件がすめば、突

然と思われる位の早さで私は辞意を表明するのが癖であるが、これまでに、この方法はどうか相手に好感を与えて来たやうである。

お愛想に「まあごゆっくり下さいよ」と云えば、

「じゃあもう少し喋舌らせて貰いましょう」など云われると、ぞつとする。

これこそ、堪らない嫌味である。さき頃、京都府の亀岡方面に開拓地の分譲をしているので、一度見に来て貰えまいか——と云う開拓会社のセールスマンがやって来た。近頃流行の販売方法をやっている人に過ぎないが、時々こう云う人がやって来る。買いたくても金はない、只生きて行くだけ金が一杯だから、もつと金持ちの人に宣伝してやつて下さいと云う風に私は逃げ続けて来た。

ところが今度の人は、何時ものように告げると、突然話題を変えた。私などには目も呉れないで、本棚へ目を移して、「この本全部読まれましたか」と云う。「なかなか、どうして」「では半分位は——」「まあね」

とばやけた返事をしていると、「私も本が大好きなんですよ、其処に

ある石狩平野読みましたよ」と云う。私は吃驚した。本が好きだと云うような人に近頃は出逢つたことがない。喫茶店とかパチンコの話なら、近頃の若い人には合う。

「へえ、それは大変だったでしょう」

「若いから読み出したら止りません」

「どうやらこの人には、私もつり込まれそうだと云う気がして来る。」

「若い人は其処が強味ですね、私などとてもそうは行きませんよ」

そんなことを言い乍ら私は何時とはなく、このセールスマンのベースに引き込まれてゐることを悟つていた。

「こんな話をしていても、あなたの仕事には何のプラスにもならないから、この辺で止めておきましょう」と云つた。

「商売なんかどうでもよいのです、文学話の方が面白いからまた来ます」

そう云つてあつさりとして引上げて行つた其の青年に、私は何か爽やかなものを感じ、帰すのが惜しい気持ちにさえたのは、おかしなものである。

二、植木を購う

事務室に時折飛白にモンベと云ういでたちで、大きな籠を背負つた人が植木を売りに来る。大抵島根県地方からの出稼ぎであるようだ。

大阪辺りに特定の根拠地があつて、そこから多くの人が八方へ籠を背負つて出ているようである。

私も時折はこの人達から植木を買うのだが、値段がまちまちになっている。一体最低値はどれ位なのか薩張り解らない。

一本五百円だと云うから五百円を支払つて買う。或る程度人々が買つた後で、三本千円位ではどうだと云う人が現われると、それで結構です、買つて下さいと云う有様。僅か十分か十五分の間にここまで値下げすると云うことは、最初に買った者の気分は悪い。

こう云うことで、私は百貨店などの正札付き品物を買つた時の方が、どれだけ買物に対して爽やか味が持てるか解らないと思う。其の値段は大抵の場合少しく高値気味ではあるが、気持よく買えたことが、楽しい。

そうした意味で、私は一寸位高くてもなるべく百貨店で買物をすませることにしている。

物価高が問題になっている折柄ではあるが、矢張り大きな店程客が多いのは、買つた品物に安堵感が盛り込まれているからであらうと思ひ、其処に値打ちがある訳だと、私は独り手に解釈している。

三、秋のおとずれ

永々しい梅雨によりやく終止符が打つたと思つたら、次に来たのが酷い暑さである。

この暑さがまた解消されると、台風が現われると云う案配で人間生きて行く上に於いても却々に楽なものではない。

大自然の動向には、私共は常に引き摺り廻されていなければならぬ。人間の力も、大自然に向つては実にもろいものではないかと云う気がする。

併し反面、これに順応して生きて行けるのも、人間の特権と云えそうだ。

夏に咲いた燃えるような美しい花も、秋になると其の魅力を失ひ、また秋に咲いた花々も冬には姿を消す。これは虫けらにも同じことが言えそうだが、人間丈だけは死なない。どれ程暑い日に逢つても、またきびしい寒さに逢つても、人間にはそれに順応出来る強味がある。それは其の季節、季節に順応して生きて行く丈の智慧を持つてゐるからだと云うことが、強味と云うべきところであらう。裸で冬の寒さに打突かるような愚は演じないし、厚着のまま夏を越そうと云うような愚かなこともしない。むしろ、其の季節をエンジンジョーイする丈のゆとりさえ持つてゐる。

秋は私の一番好きな季節である。涼風が訪れて来ると庭隅でコウロギの音がする、これは新しい立売住宅などの人達には見られない風情であらうが、私の家は至つて古いのだ、だからこうした自然の恵みに接することが出来るのだ——と云う風に、私は百年も経て来た吾家に対して、負け惜しみともつかぬ妙な言い訳がしたいのである。其のコウロギの音が、庭隅であるのには間違ひはない。だが、さて、これを探そうとしても、却々に声の主を認めることは出来ない。遠くなつたり、近くなつたり、反響する物に当る風の都合で、殆ど、何処に居るのか解らぬ。それがまた、実に楽しいのである。

私は永年、医者門を叩いたこともない代りに、夜はよく眠る。十時に床に這入ると、朝六時までには殆んど何も知らない程寝込んでしまふ、夜中にトイレに立つようなことは、殆どない。

偶に、夜半トイレに立つようなことがあると、庭全面に、何と云う虫なのか絶えることなく、啼き続ける虫がいる。一方の音が休むと、他方のものが其の後を享けて鳴く、たまには其の音が重なつたりして、それも深夜の静寂に調和するやう細い微かな声音が、縷々として続くのである。

朝、昨夜の声の主を探がそうとして、植木鉢などを移動させて見るのだが、何も居ない。只、妙なものと云う思いが残るだけ。

すべて虫の声と云うものは、其の本体が解らないところに、妙味があるのではなからうかと、私は独り考へてゐるのである。

声のよいものは其の姿は綺麗でない、顔のよい人は其の声は余り感心出来ないなど、人間界でもそう云うことがよく言われるのだから、今後も、私は強いてそれらの虫の姿を探そうとはしないであらう。



記念集会とバザーのお知らせ

時 11月10日(日)

午前11時から午後3時

場所 仁川団地集会所(例年通りです)

内容

○10時半～11時

会場の整備とバザーの品物の陳列
(時間に余裕のある方は手伝って下さい)

○11時～12時

日比野都さんの講演

○12時～1時

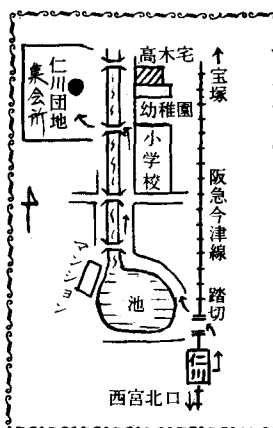
楽しいおしゃべりをしながら昼食
(お弁当・おやつは各自でご用意下さい)

○1時～2時

「わいふ」についての話し合い。
今後のわいふについて、編集部よりある提案をしますので、それについての話し合い。

○2時～3時

バザー



※バザーについてのお願い——バザーの品物を遠方より送っていただくには、送料も高くなっていることですし、原則として当日参加される方だけの持ち寄りと致します。又、当日値だんつけをしていただくのでは時間的にロスが多いので、出品される品物には適当に値段をつけて御持参下さい。
では皆さま多数ご参加をお待ちします。

0798 51.4360

毎月一回十日発行

原稿・誌代の送り先

〒665 宝塚市仁川宮西町1の72

「わいふ編集部」

発行人 高木由利子

発行所 わいふ発行所

振替口座番号 神戸19515

印刷所 百合写植印刷有限公司

誌代 一部 百円(送料25円)

原稿不切 毎月二十五日

(以降翌月まわし)